

〔総 説〕

## 大学に棲む異能の自閉スペクトラム症者たち

Geniuses with autistic traits observed in universities

小 川 豊 昭\*

Toyoaki OGAWA\*

### Summary

I discussed characteristics of highly intelligent autists observed in universities. Their world is constituted by strict logic that has no room for contradictions. That means their world is rigid and there is no possibility of development or even a little change. It is a solipsistic subject that has no connection with others or cannot make a community or group. These characteristics are favorable for the researchers because the research is the purchasing of some pre-suppositions to the limits. These attitudes are some of the fundamental elements needed in developing the research.

### 1. 高機能自閉スペクトラムの天才たち

ここでは、ヴァイトゲンシュタイン、フォン・ノイマン、ジュリア・クリステバ、名大のノーベル賞受賞者たち、鳥津製作所の田中氏などを取り上げてみたい。

まず、田中耕一氏を取り上げてみたい。彼は2002年にソフトレーザによる質量分析技術の開発でノーベル賞を受賞したことで知られている。受賞した当時彼は鳥津製作所の主任研究員であったが、課長よりも下でいわば研究者としては下っ端だったというので注目を集めた。天才的能力と業績のある人が会社の組織では評価されていなかったということの見本である。彼は実際見るからに地味で何かアピールする要素がない。すなわち正常人として必要な程度のヒステリー性を持っていないということである。ヒステリー性は、逆に雰囲気を作る能力ともいえる。人間関係の重要な要素である雰囲気がないといつの間にか排除されてしまうのである。彼は学生のころソニーの入社試験を受けて頭が真っ白になり何も答えられなかったという。我々の大学でも学生たちは入社試験に向けて自己アピールの練習をしているが、これはヒステリー性を磨いているということであるし、社会ではヒステリー性がコミュニケーション能力と言われて特に重視されるのである。このような現代社会では、田中氏のような才能はなかなか評価されないといえる。

ここで、簡単にヒステリー能力、雰囲気について簡単に述べておく。「目は口ほどにものを言い」という言葉がある。つまりまなごしは雄弁にしゃべるわけである。あるいは、ちょっとした表情がその人の気持ちを表し、それが周囲の人に伝染してその場の雰囲気が出来ていく。さらには、声の調子や口調も雰囲気を作り出し、周囲の人を巻き込む。お通夜の声や表情の場合もあるし、逆に抗議集会での集団の盛り上がりというものもある。これらは、まなごしも声も表情もいずれも筋肉運動であることに注目して欲しい。人間の精神は、このような筋肉運動とその受容器がペアになって連結してグループ無意識というものを作っている。いわば眼差し表情などの接続を通してネットにログインしているといえる。ところが自閉スペクトラム者は、このようなログインがされていないので、集団の無意識から外れていると考えられる。

田中氏に戻ると、彼は自分一人の世界でものを相手にそのモノの世界を探索する能力には優れているが、鳥津製作所という会社組織の中では外れていたのではないだろうか。そして誰も彼には注目しなかったということであろう。自閉性はいわばヒステリー性の逆なので、自閉スペクトラム者は、女性とうまくいかないことが多く、独身であったり結婚していても夫婦仲がうまくいかないことが多い。田中氏の場合は20回のお見合いをしたことを述べているが、彼が女性のヒステリー性を理解で

\* 名古屋大学大学院精神病理学・精神療法学 / 総合保健体育科学センター

\* Designated Professor of Graduate School of Medicine, Psychopathology & Psychotherapy/Research center for health and sports, Nagoya University

きないところからきている可能性はある。

名大の他のノーベル賞受賞者については、差しさわりの無いようにごく簡単に触れておきたい。最初は、素粒子理論物理の益川敏英先生を取り上げたい。益川さんとは、彼のノーベル賞受賞前に話す機会があったので、よく覚えている。彼は非常に小柄で明るく子供のように屈託なく、いたずら小僧のような雰囲気であった。私は、自閉スペクトラムの直観診断として、「くりっ、けろっ」というのを重視している。目がくりっとしてケロっとした表情をしているのである。これはかなり当たると自負している。年齢相応の人生の重みを表情に刻んでいないのである。相当に若々しく見えるとも言える。益川さんの場合は、本当に子供のように大人の持つ裏もないような印象であった。彼は老年期でも子供のようにいたずらっぽく、8時2分の出勤時間から逆算して夜9時36分に入浴するということを実践していた。ノーベル賞を取ってなければ、偏屈な頑固おやじである。彼が英語が全く苦手というのはよく知られている。本当かどうか知らないがノーベル賞受賞論文も日本語で書かれたものだといわれている。受賞講演も *I can't speak English*, と一言言った後は、日本語だったことは有名である。後で述べるが言語との関係が普通人と違うところが自閉系の人の特徴である。そもそも自閉症児は、言葉を持つことができないという点の特徴なので自閉系の人の言葉との関係も考えてみる必要があるのは明らかである。アインシュタインが4歳まで言葉が出なかったといわれているのと反対に言葉の天才の中にも自閉スペクトラムの要因が作用しているとみられるケースが多い。先取りして述べておくと大学の研究者の中でも言語学と数学に自閉スペクトラム者が多いのは驚くほどである。そもそも言語は身体と同じ水準に位置しているといえる。つまり我々は言葉を使うときに体を動かすのと同じように意識せずに使っている。そもそもこの使うといういい方はすでに体や言葉を対象化しているが、我々が言葉を使うときには対象としては使わず自分の主体性の一部のように主体的に動くのである。このように自然に我々に備わっている言語は何か特別な事情がなければ注意の対象とはならない。ちょうど我々が眼鏡を使うときに眼鏡の存在を気にしないのと同じである。逆に言語を道具として使うとなると言語を対象化しなくてはならない。ちょうどものを見るのに眼鏡ばかりに注目するようなものであり、それではかえってものが見えない。言語学者は、そもそも普通人が対象化しないものを対象として使う必要に迫られて育った人ではないかと思う。すなわち母国語がすでに外国語の学習のようになっているのである。言語と自閉スペクトラム者との関係については、また後に取り上げることとする。

名大関係では、オワンクラゲから蛍光染色物質を抽出してノーベル賞を受賞した下村さんを取り上げたいと思ったが、別の機会にしたい。ただ、必要とはいえ、毎年5万匹のオワンクラゲを家族総出で毎週末採取に行ったという生活は普通の人にはできないことであるし、それにつき合わされた家族も大変だっただろうと思う。

次にヴィトゲンシュタインを見てみよう。ヴィトゲンシュタインはオーストリアの哲学者で論理学者である。彼は生涯孤独にさいなまれ自殺を考えていたが、彼の論理学は極めて独創的で思想界にインパクトを与えたといわれている。彼の思想の本質は、この現実世界は言語と論理の世界と等価だというものである。彼は、この世界に突然産み落とされた宇宙人、あるいは昆虫のようなもので、知能と道具としての言葉だけを持っているという状況と考えることができる。他者や共同体の中でその一員であるという感覚を一切持たない部外者である。その彼が、この世界をどう理解したいのかと苦闘したのが彼の「論考」などの論理哲学である。彼は、まったく一人だけが使用する個人的言語は可能かと思案しているが、彼の住む世界はまさにこの個人的言語の世界であって、たまたま周囲の人が使う言語でもあったというだけのことである。このようなあり方はまさに自閉スペクトラム者の住む世界を極端に推し進めたものといえる。彼は、若いころにノルウエー山小屋にこもって執筆した論理学に関する論文で学位を取得することを考え、ムーアを通して大学当局へ打診したことがある。しかし、規定によると、学位論文にはきちんと註が付いていなければならない(どこまでが先行する研究の引用で、どこからがオリジナルな研究かを示すため)。そのため、ヴィトゲンシュタインの論文は規定を満たさないので通過しないとの返事がムーアから寄せられた。ヴィトゲンシュタインは「どうしてそんなくだらない規定があるのか」「地獄へ落ちたほうがマシだ」「さもなければあなたが地獄へ落ちろ」とムーアを罵倒した。この一件でヴィトゲンシュタインは友人と学位を一挙に失い、取り戻すのは実に15年後のこととなる。ヴィトゲンシュタインは、哲学的問題を解決したと考え興味を失い、30代にはスイスの田舎で小学校教師となった。彼なりに一生懸命取り組み、熱心に教えたが、児童がルールを守らないと容赦のない体罰を加えたため、父兄から弾劾されて辞めざるを得なかった。彼自身に悪意はなく、正しいことをしたまでなのだろう。彼はこのエピソードにひどく傷ついたといわれているが、生徒や父兄にも深い傷跡を残したはずである。

次にフォン・ノイマンを取り上げてみる。ハンガリー出身の数学者でコンピューターの創始者と言われている。広島、長崎の原爆開発にもかかわっている。暗算

と暗記にずぬけており、IQは300といわれている。当時の数学者が何か月もかかった問題を瞬時に暗算で解いたという逸話もある。私は、彼は高機能自閉スペクトラム者の一つの極限の姿を示していると考えている。これは、いわば衣笠のいう重ね着症候群の中で正常者の衣をかぶっているケースといえる。

衣笠の重ね着症候群とは、人格障害やうつ病と見えるケースで、長く精神分析的な治療を行ってもほとんど変化のないものがあるという経験から見出された一群の自閉スペクトラムである。すなわちベースが自閉症でその上に他の人格障害のパersonalityが乗っているのである。いわばこの重ね着症候群の一つとしてベースは自閉症であるがその上に一見正常者のpersonalityが乗っているということである。ベースが自閉症者である場合、自然な自明性や共感や雰囲気になじむということがないのであるが、それを知的に補うことで正常者のようにふるまうのである。どのようにして正常者のようにふるまうかという、二つのメカニズムが機能していると考えられる。

一つは、ふるまいのマニュアル化であり、もう一つは他者の気持ちのシミュレーションである。この二つともスムーズに機能するためには非常に高い知能が必要となる。自閉スペクトラムの採用するマニュアルとは、たいていはあまり精緻なものではなく、声を掛けられたらニコニコしてうなづくとか自慢はしないとかいうレベルのものであるが、怒ったりせずニコニコしているとほとんどの共同体でいい人だということを受け入れられるものである。ただ、これでは夫婦などの緊密な関係はうまくいかないのは、当然である。一方の他者の気持ちのシミュレーションは、「相手の身になって考える」という仕方である。「相手の身になって考える」は正常者の他者理解ではないかと反論される方もいるかもしれないが、このように相手の立場に自分を置いてみてその状況を再現しシミュレートするのは自閉系の人のやり方である。正常者は、自分の子供が駆けてきて目の前で転んで顔面を岩にぶついたら、自分の顔に激しい痛みを感じるのである。そこでの経験は、ダイレクトであることがわかる。ところが現象学の創始者であるエドモンド・フッサールは、間主観性がどのように可能であるかを論じて、類比的対化という概念を提出している。これはそもそも人間が他者の主観を認識するのにどうしているかという議論で、自分を他者の位置においてペアを作り類比しているというのである。はっきり言って、こんな理論を作るということだけでもフッサールが自閉スペクトラム者であることがわかる。

さて、フォン・ノイマンに戻ろう。高校時代、彼は同窓生たちによるとみんなから好かれようと懸命に努力

しており、いばるそぶりや自分の殻に閉じこもって周りを見無視するようなことは無かったと報告されている。好かれようと懸命に努力というのは、思春期には大いにありうることであるが、そもそも雰囲気を読めない彼は仲間関係のやり取りを子細に観察して、こういう態度をされたときは、このように答えるというような精緻なマニュアルを作って蓄えていったと思われる。彼は、研究者仲間の中では、いつもジョークを連発して周囲には笑いが絶えなかったという。とても明るい良い人を演じていたのであるが、実際は、無数のジョークを暗記していて、連発していたにすぎないのである。実際、親密な関係である夫婦関係は破たんして離婚へ至っている。彼の伝記で注目すべきなのは、運動が全く駄目だったという点である。これは、多くの自閉スペクトラム者の特徴である。身体としての言語が自然に使えないと同様に自分の身体を自然に使えないのである。とはいえ、身体を徹底して道具として使うことで超人的なレベルに達することもある。ロシアバレエのニジンスキーはそのようなタイプではないかと思う。それについては、ここでは詳しく述べない。

最後に言語学の天才、ジュリア・クリステバを取り上げてみる。ブルガリア出身で若いころは美人で有名なフランスの記号論、思想家、精神分析家である。難解で膨大な著書を表している。彼女自身は全く自閉スペクトラム的などころがなく、実に伸びやかな人である。しかし、二つの点で自閉との関連を指摘しておきたい。一つは、記号論について非常に難解な著書を書くという点である。単に頭がいいというだけではなく、記号論という無味乾燥なものでこの現実世界をとらえることにそれほど熱中したという動機を疑うのである。先に言語学者に自閉系が多いことを述べたが、彼女についてもその印象を受けるのである。それは、彼女がしゃべるのを聞いたときの違和感から私が直観するものである。彼女は、話すときに自然な間合いとか抑揚がなく、完璧で非常に複雑なフランス語を機関銃のように話すのである。いかにも頭の回転の速い優れた学者という印象であるが、何か奇妙な印象を受けた。コンピューターが高速でデータを打ち出している印象である。

もう一つここで述べたい点は状況証拠であり根拠のない結び付けであることをお断りしておきたい。クリステバは、フランスの前衛小説家のフィリップ・ソレルスと結婚して一粒種の息子がいる。すでに中年になっていると思うが、この息子は自分の排泄の世話もできない重度の自閉症であるという。これは、我々のもとに留学していたフランス人男子学生がかつてクリステバ家で子守のバイトをしていたことで教えてもらった事実である。ここで言いたいのは、勝手な推理であるが、小説

家と記号論学者のカップルのどちらもが言葉と非常にかかわりの深い仕事であるのに、その子供が全く言葉を持たないという点である。すなわち自閉的遺伝傾向と言語の問題が両極端の形で出ていると考えると面白いと思うのである。ちなみに、クリステバが記号論を論じていたころは何か尋常でない複雑な論理を展開する人という印象があった。しかしその後彼女が精神分析に転向してからの著作ははっきり言って凡庸である。すなわち言語を情緒や感情という身体に結び付けた次元を扱うようになってからは自由を失ったといえる。

以上、自閉系の天才を取り上げて、そこで自閉スペクトラム者の特徴をいくつか取り上げて簡単に触れておいた。ここでそれをもう一度整理しておきたい。

\*ヒステリー性の欠如。面接がだめ。女性との関係が苦手。地味で暗い印象。離婚率は8割といわれている。

\*明るい子供のような印象。「くりつけろっ」という直観診断。目がくりっとしていて、ケロツとした表情である。

\*言葉がうまく使えないか、あるいは、言語学に非常に興味を持つという言語との特異な関係。道具としての言語と身体としての言語ともいえる。

\*重ね着症候群の中の健康なパーソナリティーとの重ね着。ピオンなどイギリスの対象関係論者は人格の中の自閉的部分と健常な部分という言い方をして、どのような人にも両面があって健常者と自閉スペクトラム者との間にはなめらかな移行があると考えている。私は土台が自閉かどうかで断絶があると考えている。すなわちどれほど正常に見えても土台が自閉の人たちがいるということを指摘したい。特に研究者などの知的に優れた人に多く見られることも指摘しておきたい。

\*健常者を装う自閉スペクトラムの二つの戦略として、マニュアル化とシミュレーションのあることを述べた。すなわち自然な自明性がないので、状況ごとに細かくやり方を記したマニュアルを作るというやり方で代わりにするのである。ブランケンブルグの「自然な自明性の喪失」という著書はあまりはやらなくなったが、この事態はまさに自閉スペクトラム者の住む世界のことである。自明性とは、ほんのちょっとした普通なら当たり前にかかる些細なことというがそれをマニュアル化すると膨大な量のものとなるのはわかるであろう。ちなみに、私の考えでは、自閉スペクトラム者では超自我が存在せず、マニュアルがその機能を果たしているようである。そのためどれほど正常にふるまい正常者のように見えても、このタイプの人の精神分析を行うと全くうまくいかない。無意識がないのである。無理に行うとそのような表層の正常者のパーソナリティーがはげ落ちて、患者は自分が全く他の人との結びつきのない異質な存在で

あり身動きもできない、土台のない奈落の底に落ちるような体験をすることになる。すなわち正常を装っている自閉スペクトラムには精神分析は禁忌である。ではどうすればよいか。権威的にしつけるようにするか、あるいはほめて育てるである。この点については、また後に述べる。

## 2. 自閉スペクトラム者のいくつかの例

### a. 世界をシステム化する研究者

A教授は、現在40代数理系の研究者である。Aは、博士課程で指導教授にいじめられて抑うつになり、投薬を受けていたという。その後T大に赴任してきて以来15年ほど週1回の自由連想法による精神分析的な精神療法を受けた。しかし、まったく変化は起こらず転移も生じないで、淡々と冷静に身辺のことを報告するのであった。

彼は、長身でいつもにこやかに穏やかに話した。彼は治療開始後5年ほどの時に紹介された女性と結婚し子供もいる。妻とは、徐々に関係が悪化し現在は家庭内別居で会話はなし、彼も家族が起きている間は常に大学にいるか街をさまよっている。なぜそのようなことになってしまったのか。それは、例えば妻が喧嘩の勢いで「あんたなんか顔も見たくないわ」というと後で妻がいくら「それは言葉の綾だ」と訂正しても、その時の言葉が彼には絶対命令となってしまっていて、いらい彼は、妻と顔を合わさないように全力を尽くすのであった。彼は淡々と「命令」を実行するというよりは、自分を排除する妻に対する激しい怒りを感じていた。しかし、それは表情にも出ず、穏やかな表情であった。

治療も10年たったころ、彼はテンプル・グランディンの自伝を読み、自分が自閉スペクトラムではないかと思うようになった。そしてその目で見るといろいろなことが急にわかってきたのである。

彼は、暗い家庭の一人息子であった。母親はいつも家でテレビを見てぼうっと無為に時間を過ごしている人であったという。彼が今考えると母親も少し重めの自閉スペクトラム症者だったであろうという。

彼は、2歳で字が読めたが、字の読み方を推理している幼児の自分をはっきりと覚えているという。そして話始める前にどのように話すかを考えていたという。そのようにして彼はしゃべり始めの最初から大人の言葉を話したという。ちなみに彼は関西の出身であるが常に標準語を話し、現在も全く関西弁の名残はない。さて幼稚園のころは自分一人の世界に入っているも許されて幸せだったが、小学校に入ってから、集団行動を強いられそこで仲間意識も持てないし仲間に入れぬ自分というものを自覚したという。そのこともあり登下校で

は常にいじめのターゲットとなり、つらい思いをしたという。当時、母親に「みんな仲良くしているほかの子を見習いなさい」と言われ、自分をいじめる不正な子供たちを見習えと言われたその理不尽さに激しい怒りを覚え、おとなしい彼としては珍しく母親に食ってかかったという。

このエピソードは、彼が共同体としての人間社会に対する理不尽さを意識した最初の出来事である。いじめという不正をしていても集団をなすとそちらが正しいことになり、集団から外れていることが悪いとされるという健全人の集団の論理である。彼とのやりとりで明確になっていったのは、「みんな仲良く」という集団化を強制する圧力や「みんな一緒に」という一体感の強制には、必ず排除の圧力が伴っていて、一体感を感じられない自分は常に排除される側になるということであった。

彼は、自分自身が自閉スペクトラムの中でも、クラゲ型とカブトムシ型に分けると自分はカブトムシ型であると述べた。自閉症者の自伝で有名なドナ・ウィリアムスは、クラゲ型であり、彼女の光や音の感覚が圧倒する世界とは自分の場合は違うと述べている。彼の奥の本質はおそらくこのクラゲ型の感覚過剰の世界なのであろうが、表面は知的論理で固めている。彼は、この世界のすべてをシステム化して理解しているという。すなわち論理的な理解でこの現実を覆っているというのである。これは、ヴィットゲンシュタインが彼の論理哲学で試みたことと本質的には同じ方向のことである。

さて、このように世界をシステム化して理解している彼は、日常世界で様々な困難に出会うことになる。その例を3つほど挙げてみたい。

まずは、学生の教育である。優秀な学生を相手にしている場合はそれほど問題はないが、近年全く優秀でない学生が入学してくるようになり、彼の問題が顕在化してきた。それは、学生が質問に答えられなくてでたらめな答えをした場合である。彼は、予想外の回答にパニックとなり、そのような答えが出る論理をその学生から聞き出そうとするのである。それで一つ一つ問い詰めていくと学生は一層答えられなくなる。彼としては途方に暮れてしまったのである。しかし、その後研究科長から呼ばれて学生に厳しすぎる、ハラスメントで訴えられかねないと注意された。彼としては、学生に対してどこがわからないかを追求しないではどうやって教えたらいのか見当もつかず、怒りとともにすっかり絶望してしまった。

次は、科研費の申請である。彼は優秀な研究成果を出しているのであるが、どうしても科研費の申請が通らないのである。詳しく聞いてみると彼は研究計画を厳密に書こうとして全くパツとしない申請書となっているよう

であった。同僚教授からも「夢を書け」とアドバイスされるのだが、彼としては「嘘は書けない」と言って、細部にこだわった厳密なものを出し続けた。その結果、不採択が続いたのである。これは、彼にアピールするとか見栄えをよくするというヒステリー的要素が欠けているためと思われた。彼には、アピールするというのは、嘘をつくことを強要されるような苦痛を感じるのであった。彼には、心的な内界が矛盾のないシステムだけの内界となっているようであった。そこには、矛盾したものを心にとどめるといふ心の広さともいえるような心的空間はなく、偽りの自分を外部に表出するというような自己表現やアピールは不可能となっている。出てくるのは、外界も内界も矛盾のないシステムだけで有る。そう考えると、彼はまるで機械のような存在でありそこでは主体性や主観性はどうなっているのかという疑問が出る。確かに彼には主体性が欠けていて、自分がどのように生きていきたいかという自発的なものは感じられないし、自分自身でもそれが無いという。とはいえ、苦痛や怒りを感じている自分というものは、はっきりと存在する。

三つ目として彼の日常での問題として重要なことと些末なことの区別がつかず、同じ重みで目の前に存在するという点である。具体的に述べると、彼が息子の学童保育の父母会長になったことから数人の父母からなる父母会の運営のことが彼の頭を占めるようになった。私は、もっと重要なことがあるだろうと気が気ではなかったが、彼はこの父母会の運営のことを何か月にもわたって延々とそればかりを話題にした。実際、父母会の運営に時間を取られて日常の仕事に差し支えていた。

このように彼は、研究では科研費で行き詰まり、教育ではハラスメントといわれ、家には帰れずいつも外を徘徊し、まさに人生に行き詰っている。この彼を毎週治療するが、事態はさっぱり改善しないという治療も行き詰まりである。彼によるとこの精神分析的治療によって、自分が今まで普通の人だと思っていた部分までが次々そうでないことが明らかになって一層自分が、周囲の人や家族とも異質な孤立した存在だと自覚させられ、つらい気持ちだと語った。

## b. 装置を子供たちと呼ぶ女性研究者

S大学のBさんは、職場で部下の女性たちの取り扱いに悩んで相談に来た。Bさんは、理系の研究者で、やや境界例的な部下の女性に振り回されて心気的な症状に悩まされていた。このケースを簡単に紹介したい。このBさんについては、3つの点で驚かされたので、それを紹介したいと考えているが、その3つの点はいずれも自閉スペクトラムの性質に由来するものであろうと考えている。

第一は、その外見と年齢のギャップである。Bさんは、理系らしい冷たい感じの美人であった。私は最初に会った時、30歳ぐらいの独身の理系研究者であろうと直観的に想像した。ちょっと高慢な感じの謎めいた女性らしい魅力もあった。ところが実際は45歳だということである。私としてはびっくり仰天した。この外見と実際の年齢のずれは、自閉スペクトラムのケースではしばしばある現象である。それは、顔に人生の年輪を刻むということがないからいつまでも若々しいのである。それは自閉スペクトラム者は表情でコミュニケーションすることがないので、のっぺりした表情であったり冷たい表情であったり、しわが寄ることもないのであろう。このケースではそれが極端に出たと思われた。

第二は、その生活歴に驚かされたのである。Bさんは、すでに2回離婚歴があり、現在は12歳年下の夫との間に3歳の男の子がいるという。2番目の結婚では二人の子供が出来たが、夫が引き取り今は会うこともないという。私は、子供たちへの未練がないのに驚かされるとともに、これほどの経験が全く顔に刻まれていないことに驚いた。自閉スペクトラムの人の人生は、しばしば脈絡がなく、どちらに向かっているのかわからない生き方というものがある。Bさんの人生行路にもそのような傾向が見られた。

第三に驚かされた点は、ここまでくるとそれほど驚かされないが、表題に述べたように彼女は、機械を子供たちと呼びいかにもいとおしそうに話すのである。Bさんは、生き別れとなった娘たちには、まったく未練がない様子であったのに、自分が管理する7台の高価な装置については、本当にうれしそうに「私の子供たち」と呼び、一緒に居られて本当に幸せだと語った。自閉スペクトラム者にはしばしばあることであるが、無生物と生物、あるいは機械と人間とは、自分のかかわる対象として何ら変わらないのである。

### c. 漢字が読めない研究者

T大学のCは、送電線網の複雑な電圧と周波数の管理についての計算で業績を上げて研究者となった30代男性である。上司によるとちょっと変わったやつとしてみんなにいじられているという。だんだんと元気がなくなり休むようになった。Cは比較的はつきりと自閉症と思われたが、特異な能力のために研究者の仕事をしているが、だんだんと不適應になっていった。Cは、ぶくっと太って無表情ないかにもオタク的な青年であった。彼の興味深い点はその言語とのかかわり方である。彼は、まったく漢字が読めないというのである。よく入試をクリアしてきたと聞くと、何とか平仮名だけで乗り越えてきたという。またその話かたは、一音一音頭で考えて

音に出す作業をしているという風で、頭脳をフル回転させてやっとロボットのようにしゃべるのであった。言葉はまさにその都度頭の中で組み立て、シミュレーションをして音に出すのであって、大変な頭脳労働であった。この言葉との関係の大変さこそ自閉スペクトラム者の本来の姿であると感じたのである。彼の言語の取り扱い方からは、とても漢字までは手が回らないのである。そのため講義で黒板に字を書くのに、平仮名と数式しか使えないのであった。このように自閉スペクトラム者でかなり重度であっても特殊な能力を持つと研究者として認められることは、可能なのである。彼の住む世界は送電線の電圧と周波数が織りなす複雑なネットワークの計算で成り立っているのである。このような数理や論理の世界に住む自閉スペクトラムはしばしばみられる。最初に挙げたAのシステム化の世界もそうであるし、近年話題となっている将棋の若い天才も同様である。彼の世界はこの狭い将棋盤上で起こった膨大な対戦記録から成り立っているのである。同様のもっと極端な例を数学の教授から聞いたことがある。彼は数年来考えていた問題を共同研究者の京大教授とともにフランスのある教授のところに相談に行ったのである。何年もかけて考えた問題であったが、そのフランスの教授は、たちどころに解いてしまったという。京大の教授はそれにショックを受けて研究者を辞めたという。フランスの先生は、10代でハーバードで学位を取り、若くして教授になったというが、地下鉄の切符も買えないほどの日常生活の能力が欠如しているという。その彼は、現実の日常生活よりも数学の世界に日常的に住んでいて、数学の理論の体系でできた建築物の中を常に歩き回り、どこに何があるかすっかりなじみで、新たな問題を持ち込まれてもたいていすでに見たことがあるという状態になっていたのである。普通の人にとっては難解な新しい問題が、彼にはなじみの街角の風景というわけである。

### 3. 自閉性ゆえのトラブルケース

さて、ここでは、自閉スペクトラム者特有のトラブルのケースを取り上げてみたい。

最大のトラブルは殺人である。P大の殺人女子学生のケースは、氷山の一角であってそれによく似たケースは、年に数ケースある。この殺人ケースについては、まだ裁判の途中であり、様々な診断がなされているが、私は自閉スペクトラム者と考えている。彼女は、事件の前に劇薬を試していて手に火傷して保健管理室を訪れ治療を受け、そのまま一日中休養して看護師の世話を受けていたということがあった。後に看護師は、最後まで彼女を男子学生と思い込んでいたと語っている。それほど

ジェンダーアイデンティティが混乱しているといえる。これはテンプル・グランディンも同様で、写真などで見ると全く男性に見える。次に彼女は、鑑定のために入院させられたが、そこでの面接で、「妹さんは事件のせいで家にいられなくなり、一人で暮らさざるを得なくなった。妹さんがどんな気持ちと思っているのか」と多少非難を込めて医師が尋ねると、「妹は喜んでいと思う。前から一人暮らしをしたいと言っていたから」と答えたという。このずれ具合はまさに自閉スペクトラム者のあり方を示していると思う。

自分の勝手な考えと殺人という重大な問題についてアンバランスという点で、もう一つ別のケースを紹介したい。これは、文系の博士課程の女子である。非常に優れた研究論文を書き、評価されている。その彼女があるときお腹が急に痛くなって耐えられなくなった。その時、ふと「神様お願いします、もしお腹の痛みを取っていただけるなら、大事な弟を犠牲にしてもいいです」と心の中でつぶやいた。すると不思議なことにまもなくおなかの痛みがなくなった。それで喜んでいたが、だんだんと不安になり「神様をお願いしたのだから、約束を守らなくてはならない」と思いはじめた。そこで本人としては辛い、同居している弟を殺さなくてはならないと考えた。その結果包丁を持って、弟が帰ってくるのを待って、弟に切りつけたのである。弟は幸い難を逃れたが驚いてその後姉を我々のもとに連れてきたのであった。ここでは腹痛の治癒と弟の殺人という全く不釣り合いなことが同じ水準で検討されているのが、いかにも自閉スペクトラム者といえる。彼女にとっては論理的に、まったく間違っていないのである。弟の命と引き換えに腹痛を直してもらったのだから、当然弟を犠牲にしなくてはならないのである。この論理は彼女にとってはあまりに自明なのであった。

次にハラスメントケースをいくつか挙げてみたい。

#### a. テレビドラマの場面を演じた D 教授

Q 大学の D は、大柄で貫録たっぷりの人である。若くして教授になったためもあり、誰にも注意されることなくこれまで数十年やってきた。ただ、若い時には上司にいじめられたと言う。教授会では常に正論を延々と演説したり、正論の立場から若手を罵倒するという態度であった。年長者であったので、ほとんど誰も反論しないまま来ていた。部下の中には、そのような扱いに抑うつになる人もいた。いつも偉そうな態度であったが会議ではついていけないのかキョトンとした表情であった。その彼が指導女子学生からセクハラで訴えられた。当時はハラスメントセンターがまだなかったので、訴えの対処を求められた執行部もどう取り扱っていいかわから

ず表ざたにならずに終わった。とはいえ、本人は何がどう悪いのか最後まで分かっていなかったようである。女子学生の訴えによると、彼女はいつも D 教授から論文指導を受けていたが、ある時ホテルのレストランで食事をしながらということになった。そして食事が終わると D 教授はおもむろに「ホテルで食事、この状況の意味は分かるね」と言ったのである。女子学生は、顔には出さなかったがぞっとしてその場から逃げ去った。その後の調査委員会で D 教授は、質問されても何が良くなかったのかわからない様子で、テレビドラマで似た場面があり、そのセリフを真似して口に出してみただけのようであった。また複数の女子学生に訴えられている理由についても、D 教授は「以前見たテレビドラマで、誘われなかった女性が嫉妬して怒ったというのがあったけど、それかなあ」と語っていた。D 教授の行動はほとんどこのように場面ごとにコード化されていて、自動的に行動しているということのようであり、その脈絡や対人的配慮はなかった。偉い教授という社会的位置づけのせいで、周囲からとがめられずにそれで通用してきたというだけのことで、彼の行動は場面場面でドラマや他の人の行動を観察したことから自動的に行われていたということのようであった。場面からずれていても通用したというのは、ちょうどアルツハイマーを発症しても気づかれない中小企業の社長のようなものであろう。彼が尊大な態度を身に着け、いわば NPD の重ね着症候群を形成できたのは、若くして得たポジションのためである。逆に自閉スペクトラム症者は、たいていの場合は、知らぬ間に仲間外れになっているという経験に傷つき自信を失い抑うつ的になっていくという道を進る。

#### b. 気が付くと学生を殴っていた准教授

R 大学の E 准教授のケースは、ハラスメントセンターから回ってきた。数年前から数回学生を殴るという事件を起こしているが、ついに複数の学生から処罰を求めて訴えを起こされたのであった。あってみると不服そうでも反抗的な目つきをしたごつい男であった。この人にすぐまわれたら学生も怖いだろうと思った。学生の訴えによるとやくざのようなひどい言葉遣いで執拗に迫り、最後に暴力をふるうということであった。

E は、自分が正しいのか相手が正しいのかという場面になると自分の正当性を主張して相手に認めさせるまで我を忘れて追及するということであった。暴力については、自分でも意識がなく、気が付くと手が出ていたということで、E の主観的体験としては、別段怒りも自覚していなかった。意識よりも先に行動が起こることであった。聞いてみると奥さんともどちらが正しいかということと言い合いになり、何時間も言い合いを続け

るとのことであった。また4歳の娘に対しても彼の勝手な理由で我を忘れて怒るといふこともしばしばであった。ただ、その場合も怒鳴るなどの行動で出るだけで、怒りの感情は自覚していなかった。

Eの父親は、偏屈な人で、若い時に上司と喧嘩したとかで、サラリーマンを辞めて民宿を経営していたが、母親に対人的なことは任せて一切表に出ない人であった。Eは、父親と些細なことでもめて10年以上も絶交していた。私は、Eのことを心配してきた学生時代の指導教授とも会って話を聞いた。指導教授によると彼の眼にはそれほど問題の人とは思えないとのことであった。現在と若いころとずいぶん印象が違うようである。その違いを問題にしてEと面談していて、彼がなぜ学生にやくざのような言葉を使うのか尋ねたところ、どうやら彼は、自分としては学生時代に身に着けた話し方をしているつものようであった。彼は思春期から学生時代には、同年代同士の話し方や態度を身に着け、それを准教授という学生を指導する立場になってもそのまま使っていたということのようであった。治療的面接を続けていくうちに彼は自分の態度が問題だと気が付き、その件で、部下の助教の部屋に行って何時間も粘るということが始まった。これには助教も参ったようであった。上司の教授は彼の問題に気づいていなかったが、自分の研究室を希望する学生が非常に少ないのを常々気にしていた。今回のことで、Eのことが学生の間で評判になっていて、それが理由で希望者が少ないということに気付いたという。すなわちEは、自閉スペクトラムとしてもそれほど異常を感じさせる人とは言えず、暴力という形で初めて表に出たといえる。

大学執行部としては辞職勧告や免職などの重い処分を検討していたようであるが、私がEの行動は発達障害という障害のためであるという診断書を出したため、学生との接触を一切禁ずるといふ処分が終わった。ただし、結局彼はいろいろな職務から外されていわば窓際族になってしまい、毎日何もすることがなく無為に過ごしている。研究をするように勧めても何のやる気もしないという状態が続いている。診断書で処分は免れたが、何もすることがないというつらい状況にはなってしまった。企業への転職は難しいということなので、他大学や研究所への転職を検討しているが、他大学で教育にかかわるとまた同じ問題を起こす恐れがあった。強力にサポートすることで、その後彼は研究所に職を得て転勤することができた。

### c. ストーカーの研究員

Fは30代男性の非常勤事務職員であるが、博士号も持つ。ただし、職は転々としていて派遣社員などもやって

きた。前年からは非常勤事務職員とはいえ、T大学ということで彼はそれをプライドの支えとしてきた。同僚女性に対するストーカー行為ということで、上司が相談に訪れ、その後本人とも面談を続けた。Fは、ねちっこく暑苦しい印象の男性で、身なりも不潔な感じがした。彼は、同僚女性たちから嫌われていたが本人は気にせず、近づいていき、しつこく話しかけることがあったり、また仕事上のミスを見つけるとそれをまた親切心から執拗に問題にするという風であった。そのため、すでに何人かの同僚女性が嫌がって退職していた。同僚女性の一人が上司に訴え出て、Fが近づかないようにしてほしいと陳情した。上司は、事情を理解して、Fに同僚女性に近づかないよう、業務命令を出した。ところが、Fは上司が同僚女性がFを好きなのに嫉妬から間を裂こうとしていると曲解し、何かと理由をつけて同僚女性に会おうとした。それで、上司はFを出勤停止にしたが、Fは毎日地下鉄の駅で一日中その同僚女性に会おうと待ち続けるようになった。私もFを地下鉄の駅で目撃して話しかけたが、ささっと逃げて行ってしまえばかりであった。それでも診察に来て、その同僚女性が上司にひどい目にあっているの、自分は助けたいのだと主張した。彼にあなたは嫌われているのではないかと伝えてもそれは誤解だというばかりであった。その後、大学執行部と法務室の努力でFを解雇した。その後もしばらく駅で待っているようであったが、いつの間にかいなくなった。Fは、今まで述べてきた自閉スペクトラムケースとは印象が違い、暑苦しく不快であったが、こういうタイプも存在する。ねちねちして上司に呼び出されて注意されても何時間も粘るのが常であったし、診察でも話は迂遠で相手のペースでいると何時間でも居座る感じであった。また自閉スペクトラムの男性は、女性との関係が難しく、嫌われるということも多い。すでに述べたように結婚は難しく、結婚しても仲の悪いことが多い。しかも当人は夫婦仲が良いと誤解している場合もしばしばである。(夫人はそのような夫を嫌悪していたり、軽蔑していたりということがしばしばである。)

最後に自閉スペクトラム者は、ヨーロッパの古典的精神病理学でパラノイアと呼ばれてきた病態のベースになる基礎疾患であろうということを述べておきたい。

### d. 同僚の不正を追及し続ける教授

S大学のG教授は、言語学の研究者である。彼は同僚のH教授と以前は共同研究もしていた。しかし、いつの間にかG教授は隣の部屋のH教授の研究の不正を追及することにすべてのエネルギーを費やすようになっていった。G教授は、独身で益も正月も昼も夜も常に研

研究室にこもって仕事をしていました。しかし、彼がそれほどの勢力を注いでいる仕事の内容は結局のところ隣の部屋のH教授の論文の不正を暴くことであった。G教授はびっしりと細かい字で数百枚になるレポートを書き、それをもとにしてH教授の論文のどこが不正かを詳細に立証しようとしていた。彼はそれをS大学の研究不正防止委員会に提出して、H教授の研究がいかに不正かを主張した。申し立てを受けた執行部はその取り扱いを巡って紛糾し、当事者の聞き取り調査も何度も行われては不正とまでは言えない、単なるずさんな研究であろうと判定が出て、またそれを不服とするG教授の申し立てが行われるということが繰り返された。さらには、H教授の教え子の研究についても異議を申し立てるので、教え子たちの人事にも影響してきた。さらに、学会に対してもH教授の研究のどこが問題かを詳細に述べた意見書を提出し、学会としても処罰するように求めた。学会も最初は対応していたが、次第に無視するようになった。その後G教授は、文科省にも研究不正として訴えた。文科省から問い合わせのあった大学当局は慌てふためき総長が研究科長を呼んで事情を聴いたが、結局不正というようなものでもないということで、この問題はそのまま放置された。すると今度はG教授は、裁判に訴えるという。私は、精神的に参っているH教授とは、頻繁に面談するし、G教授とも何度も面談した。H教授が何とか解決したいと反論したりアクションを起こすと、そのたびにG教授からは一層激しい追及と攻撃が来るのであった。

G教授は、にこやかで穏やかそうな人で、やや表情は少なく、つるつとした顔をしていた。人間としての苦悩を経験していないという他の自閉スペクトラムのケースとも共通していた。私は、彼になぜそれほど熱心にH教授の不正を追及するのか、そんな暇があったら自分の研究をしたらどうかと話した。すると彼は、この苦しみから解放して欲しいという、自分は不正を放置できないので、義務として追及しているだけで、早く終わりにしたいという。またH教授たちは、全然話が通じず、ぐるになって自分について悪い噂を流している、彼は発達障害ではないかと主張するのであった。その後もG教授は、大学当局にも学会にも新たに訴えを起こし、教授会でH教授の教え子の研究について学位審査が議題に上がると執拗に不正であると訴え他の教授たちは、かわりたくない逃げ腰になるのであった。ただ、新任教員は、彼の主張に共感し、不正な研究は糾弾するということで彼と意気投合するということもある。それほど一見異常は感じさせない人である。しかし、やっていることはパラノイアといってよいであろう。

先に述べたが、言語学の研究者に自閉スペクトラム症

者の出現率が非常に高いという印象を持っている。彼の不正調査委員（言語学者たち）たちとも面談したが、ことごとく自閉スペクトラムの印象を持った。その一人からは、息子が醜貌恐怖と自己臭で外に出られないということで相談があったが、ベースは自閉スペクトラムと思われた。すなわち、従来自己臭など思春期妄想症と言われてきた重症対人恐怖は、ベースに自閉スペクトラムの病理があるのではないだろうか。

#### e. 上司の言葉で傷ついたら執拗に賠償を求める女性研究者

Q大学の准教授Iさんは、上司の「お前の責任だ」という言葉に傷つき、自殺しようと屋上を徘徊し、その後抑うつに陥ったと訴えて私のもとを訪れた。

Iさんは、まったく化粧気のない地味だが子供のような印象の女性であった。一目で自閉スペクトラム症のケースと感じた。話を聞くと彼女は、上司から十分な説明のないまま研究費の管理を任されていたが、その管理の仕方について、あとから「それは不正でお前の責任だ」といわれた。それでショックを受けて死のうと思いい、ビルの屋上をさまよったという。抑うつは数か月続いたが、よく考えてその上司の不当な非難だと考えるようになった。そう考えると自分が自殺を試みたりうつに陥ったのは、上司のせいだと考えるようになった。そこで上司の非難が不当で自分は傷ついて病気になったと主張し、何度も上司と面談し、その間も数千通の長文のメールを上司に送った。このメールの数や量は桁外れであった。最初までもに対応していた上司や大学当局の担当理事もすっかりノイローゼ状態となり、私に相談してきた。

Iさんとの面談では、Iさんは今までにも他の施設で、同僚や上司の言葉に傷つき抑うつに陥ったというエピソードが他にも2件あることが明らかになった。私は、Iさんに自閉スペクトラムであることとトラウマを受けやすいことなどを伝えた。すると自分の生きにくさの理由がわかってスッキリしたと語った。その後もことあるごとに私に長文のメールを送ってきて相談した。この私との関係は、いわば付着同一化であったと思われる。Iさんは、その後転勤となったので、別のクリニックの医師を紹介したが、そこでは些細なことから不信感を持つようになり、その医師にカルテ開示の申請を行ったり、その治療費を払うように労基署に訴えたりした。労基署でも取り扱いに困り、私に相談してきた。Iさんは、一万円足らずの治療費を得るために新幹線で数万もかかるQ市まで来て労基署に訴えるのであった。何が重要で何が些細なことなのかの転倒が起きていると感じた。Iさんは、遠方から労基署に訴えて話すことをとても楽

しみにしていると語っていた。またこの労基署への訴えに大学執行部も苦慮していて、法務室とも相談して、流れに任せるということになった。ちなみに、Iさんには、高校生の一人息子がいるが発達障害の診断を受けている。その息子は、非常に優秀とのことであった。その点でも自閉スペクトラムの遺伝性について感じる場所があった。

#### f. 脈絡のない人生

自閉スペクトラムのケースでは、その生活歴を聞いていくと全く一貫性のない「脈絡のない人生」を送ってきているという印象を受ける場合がしばしばある。このようなケースは、大学内では、ポストクを渡り歩いている研究者や任期付きの特任教員、また非常勤事務職員などの中にしばしばみられる。そのような研究者の中には、40歳で家族もあるのに失業し、路頭に迷うという気の毒なケースも多くある。しかし、一方で自分で望んで不安定な立場を渡り歩く人もいるのである。そのようなケースを一つ紹介したい。

Jさんは、30代女性非常勤事務補佐員である。県内トップの受験高校で上位の成績であったが、いじめにあって高3で退学した。その後大検で高卒資格をえて、T大の修士を卒業した。博士課程へは研究の目的意識がないということで不合格になった。2年ほど自宅でぶらぶらして、その後国家公務員になったが1年半で退職。何のために働いているのか意識がなかったという。同世代との付き合いもなく、何の話をしているのかもわからなかったという。さらにその後、国家試験の1種に合格し官庁訪問に行ったが、仕事に対する考えが甘いと、内定をもらえなかった。31歳である出先機関の任期付き職員を務めた。その後P大学の生物学系の非常勤事務補佐員として勤め始めた。

私のもとには自分は発達障害ではないかと相談を希望してきた。内容は、人との関係の築き方を教えて欲しい。同年代の人に対しては恐怖心しかないという。Jさんは、中学生と言っても通用するような幼い印象の女性で、先に述べた「くりっ、ケロッ」とした印象を受けた。診察に通うようになると、診察のたびにあれこれ質問して粘るため時間をオーバーしがちであった。また膨大なメールを送ってきてどうしたらよいかと尋ねた。職場でもJさんは、優秀な反面、融通が利かずしつこいため持て余し気味であった。上司は、何とか早くやめて欲しいという風であった。結局、Jさんは先のあてもなく退職した。その後メールが来て、医学部を目指して受験勉強をしているという。成績だけなら受かると思われるが、これからの人生も男性との縁もなくふらふらと進むのではないかと予想される。自閉スペクトラムの特徴と

して自発的な主体性がないということがある。その側面が強いと脈絡のない職業選択をし、実際にあれこれ脈絡のない人生を送るということになりがちである。逆に一つにこだわってそれを追及することで評価されるケースもある。その場合も自分というものがあって主体的に何かを追及して生きるというのではなく、単にある対象に付着しているだけと見えるのが特徴である。

#### 4. 結論およびまとめ

以上、ここで取り上げた自閉スペクトラム症者たちは、実に様々でこれらをひとくくりにするのは難しいと思われるかもしれない。しかし、すべてに共通する独特の印象がある。これを言葉にするのは難しい。人間的厚みがなくしばらく診察をしてなじんでくるとへばりついてくるのである。また治療を続けても全く変わらないというのも特徴であろう。人間的なやりとりの後でも成長するということがないので、治療者としては徒労感を感じる。

すぐに上で述べたケースIさんでは、「お前の責任だ」という言葉を何の疑いもなく真に受けて、自殺しようとしている。このように言葉を真に受けてトラウマへと至るし、女子学生を誘惑してケロッとしているD教授も、厚顔無恥のようできてよく見るとどこか素直で裏のない子供のような憎めない性格である。彼らはいわゆる厚顔無恥というあり方の正反対といえる。すなわち自閉スペクトラム症の人たちは実にいろいろな表現型を取るが共通して言えるのは、面の皮が全く薄いということであり、他者の言葉が直接に貫いて傷つけるのである。この皮膚の薄さとまた人格の厚みの無さや裏の無さがまた一つの特徴である。

次の特徴は、いったん思い込むと訂正不能という点である。それが強く出るとパラノイアのようであるし、ある対象に固着するとストーカーとなる。我々の経験した範囲では、ストーカーは、いずれも重大な結果をもたらすし、自殺もすでに数例ある。いずれにせよ、自閉スペクトラム者は、訂正不能性を示しているのがわかると思う。これは、他者と意味のある相互作用がなく、自閉的唯我独尊の世界に住んでいるからである。他者との本当のかかわりが無いので、他者から影響を受けて変化するという健全人では可能なことが不可能になってしまっているのである。他者との関りから学んだり変化したりしないというのは、彼らに裏がない、あるいは心的空間がないということと同じ事態の違う表現といえる。彼らには、心の広さすなわち矛盾をしまい込む空間がなくて、すべてが整合性のある世界に生きている。整合的で矛盾のない体系には動きがない。変化の可能性がないので

ある。すべてが整合的な死の世界として最初から表に出ているともいえる。甲殻類型自閉スペクトラムの殻とは、整合的論理の殻のことで有り。不動の硬さがある。

彼らにとって他者が主観を持って存在しているということが直観的には、感じられない。我々という共同主観の流れには入っていないため、いつの間にか排除されているのである。彼らにとっては自分自身に奥行きがないと同様に他者にも奥行きがなく、社会的なレットルや役割として存在している。ただ、密着するあたたかな存在としての他者も求めているので、他者とのつながりのない孤独を苦痛に感じることもある。また彼らは、まなざしを避けたりあるいは異常に見つめたりして、話す。それは、他者の存在が目に見えるだけの平面的な存在であるのに対し、他者のまなざしの奥には得体のしれない暗黒を感じるからである。他者が怖いのは、こういう心理によると思われる。まなざしは、心の窓と言われたり、「目は口ほどにものを言う」ということわざにもあるが、人間は想像以上にまなざしによるコミュニケーションを行っている。場の雰囲気もまなざしによって伝わる。人は、まなざしによって集団無意識にちょうどコンピューターがネットに繋がるようにログインしている。

正常者と自閉スペクトラム者が連続的なのか、断絶しているのかについて、私は、断絶していると考えている。ただ表にはほとんどわからない全く正常に見える自閉スペクトラム者もいるので、そのようなケースを含めるとおそらく人口の10から20パーセントが、ベースに自閉構造を持っていると思われる。それほど一般的な自閉性というものをわざわざ取り出して診断する理由はどこにあるのか。それは、抑うつにせよ不安発作にせよ神経症にせよ、ベースに自閉性がある場合は、いずれも慢性化して治療が困難である。慢性抑うつ一つをとってもこういう理解があると対応がしやすいといえる。

遺伝性について、一言述べておきたい。私は教職員の診察で年間60人ほどの新患を見ている。その中で子供の相談というのもあり、ここ数年の子供の相談のケースのほとんどは自閉症かその関連の疾患である。ここ数年のケースですぐに思い浮かぶものだけで、5例ある。優秀な先生で実は子供が自閉だと打ち明けられたこともしばしばあった。研究マインドと自閉スペクトラムの素因が関連しているのは間違いないと思われる。

(以上の報告されているケースは、プライバシー保護のため、事実からはいろいろと変更されている。)

## 5. 参考文献

(必ずしも本文中で言及していないが、自閉スペクトラムと異能との関係を考えるうえで重要なもの。)

- 1) Ambrose A: Wittgenstein's Lectures. Cambridge, 1932-1935. Basil Blackwell, 1979. アリス・アンブローズ編、野矢茂樹訳、Wittgenstein の講義、ケンブリッジ1932-1935年。劉草書房、1991年。
- 2) Augustine AS: Confessions. 山田晶訳、アウグスチヌス著：告白。中央公論社、1978。
- 3) Edmonds D, Eidinow J: Wittgenstein's Poker: The Story of a Ten Minute Argument Between Two Great Philosophers. Faber and Faber, 2001. 二木麻里訳：ポパーと Wittgenstein のあいだで交わされた世上名高い10分間の大激論の謎。筑摩書房、2003。
- 4) 福本修：「心の理論」仮説と『哲学探究』——アスペルガー症候群 [から / を] 見たウイトゲンシュタイン (特集自閉症), imago (青土社) 7(11) 1996. 10, pp.144-163.
- 5) 福本修: Asperger 症候群 (高機能自閉症) の創造性, 「臨床精神医学講座 special issue 第8巻: 病跡学」, 中山書店, 2002.
- 6) Gillberg C: A guide to Asperger Syndrome. Cambridge UP, 2002. 田中康雄監修・森田由美訳：アスペルガー症候群がわかる本。理解と対応のためのガイドブック, 明石書店, 2003.
- 7) Jardine, A. et al.: At the Risk of Thinking – An Intellectual Biography of Julia Kristeva, Bloomsbury Publishing, 2020.
- 8) 飯田隆：ウイトゲンシュタイン 言語の限界。講談社, 1997.
- 9) Kripke S: Wittgenstein on Rules and Private Language – An Elementary Exposition, Basil Blackwell, Oxford, 1981. 黒崎宏訳: ウイトゲンシュタインのパラドックス, 産業図書.
- 10) 黒崎宏: クリプキの『探究』解釈とウイトゲンシュタインの世界, 現代思想, vol.13-14, pp.32-43, 青土社, 1985.
- 11) マクレイ, ノーマン: フォン・ノイマンの生涯. 渡辺正・芦田みどり訳, ちくま学芸文庫, 2021.
- 12) Monk R: LUDWIG WITTGENSTEIN. The Duty of Genius, Jonathan Cape Ltd, London, 1990. ウイトゲンシュタイン 1・2, みすず書房.
- 13) 茂木健一郎: 脳とクオリア——なぜ脳に心が生まれるのか. 日経サイエンス社, 1997.
- 14) 野矢茂樹: 心と他者, 勁草書房, 1995.
- 15) Park, C: Autism into Art: A Handicap Transfigured. in Schopler, E., Messibov (Ed) High-Functioning Individuals with Autism. Plenum Press, New York & London, 1992.
- 16) Paxman, J: The English: A Portrait of a People. Penguin Books, 1999. 小林章夫訳: 前代未聞のイングランド. 英国内の風変わりな人々. 筑摩書房, 2001.
- 17) 杉山登志郎 (編著): アスペルガー症候群と高機能自閉症の理解とサポート. 学習研究社, 2002.
- 18) 高橋昌一郎: フォン・ノイマンの哲学 人間のフリをした悪魔. 講談社現代新書, 2021.
- 19) 内海健: 自閉症スペクトラムの精神病理: 星をつぐ人たちのために. 医学書院, 2015.
- 20) Williams D: NOBODY NOWHERE, London, New York, Toronto, Sydney, Auckland, Doubleday, 1992. 河野万里子訳:

- 自閉症だった私へ, 新潮社.
- 21) Wittgenstein L: *Tractatus Logico-Philosophicus*, Tr. by Ogden CK. Routledge & Kegan Paul Ltd., London, 1981. 論理哲学論考, ウィトゲンシュタイン全集 1, 大修館書店.
- 22) Wittgenstein L: *Philosophical Investigations*. Tr. by Anscombe GEM, Basil Blackwell, 1958. 哲学探究, ウィトゲンシュタイン全集 8, 大修館書店.
- 23) Wittgenstein L: *Bemerkungen über die Philosophie der Psychologie*, Basil Blackwell, 1. 1980. 心理学の哲学, ウィトゲンシュタイン全集補巻 1, 大修館書店.